

道路愛護デー作業調書

町村名	團體名	作業の概要	作業延長	同上内譯			備考
				國道	府縣道	市町村道	
何村	何々道路愛護會	側溝浚渫、路面修理	1,100 <sup>米</sup>	400	800	—	出動人員 150人
何村	何々青年團	道路標識修理	10 <sup>個</sup>	5	5	—	50
何村	何小學校何年生	路面清掃	200	—	200	—	50
何村	何々	何々	500	—	500	—	100

木曾路 (三)

牧田修

八

(二十三) 最早和宮御迎への同勢が關東から京都の方へ向けて、毎日のやうにこの街道を通る。定例の人足だけでは繼立ても行き届かない。道中奉行所の小笠原美濃守は公役として既に宿々の見分に來た。尾州方の役人は美濃路から急いで來る。上松の庄屋は中津川へ行く。早駕籠で、夜中

に馬籠へ着くものすらある。尾州の領分からは、千人もの人足が隣宿美濃落合の御繼ぎ所(繼立ての場所)へ詰めることになつて、ひどい吹降りの中を人馬共にある時の下へ着いたとの報知もある。道中奉行所から渡された御印書によつて、越後越中の方面からも六十六萬石の高に相當する人足が、この御通行筋

へ加勢に来ることになつたが、よく調べて見ると、それでも足りさうもない。美濃の方ぢや、伊勢路からも人足を許されて、もう觸當てに出掛けたものもあるといふ。

美濃の鵜沼宿から信州本山までどうしても人足は通しにするより外に方法がない。俺は京都まで御奉行様の後を追つて行つて、それをお願いして来る。

和宮御迎への同勢の通行で賑はしい街道の混雑は最早九日あまりも續いた。伊那の百姓は自分等の要求が納められたいといふ顔付で、二十五人ほどづゝ一組になつて、既に馬籠へも働きに入り込んで来た。やかましい増助郷の問題の後だけに朝勤め夕勤めの人達を街道に迎へることは半藏にも感じの深いものがあつた。この多數の應援があつてさへ續々關東からやつて来る同勢の繼立てに十分だとは言へなかつたくらゐだ。馬籠峠から先は落合に詰めてゐる尾州の人足が出て、荷物の持運びその他に働くといふほどの騒ぎだ。半藏はこの混雑の中に立つて、怪我人を載せた四挺の駕籠が三留野の方から動いて来るのを目撃した。和宮の御

泊りに宛てられるといふ三留野の普請所では、小屋が潰れて、怪我をした尾張の大工達が歸國するところであるといふ。

「御繼立ての御用米が尾州から四十八俵届きました。しかねて待ち受けてゐた和宮御用の送り荷が順に到着するやうになつた。この送り荷は尾州藩の扱ひで、奥筋の御泊り宿へ送りつけるもの、その他諸色が澤山な數に上つた。日によつては三留野泊りの人足九百人、外に妻籠泊りの人足八百人が、これらの荷物について西からやつて来た。

馬籠では峠村の女馬まで狩り出して、毎日のやうにやつて来る送り荷の繼立てをした。

峠村の利三郎は牛行司ではあるが、かういふ時の周旋にはなくてはならない人だつた。世話好きな金兵衛はもとより間屋の九太夫、年寄役の儀助、同役の新七、同じく與次衛門、それらの長老達から、百姓總代の組頭庄兵衛まで、殆んど村中總がかりで事に當つた。

道路の改築もその翌日から始まつた。半藏が家の表も二

尺通り石垣を引込め、石垣を取り直せとの見分役からの達しがあつた。道路は二間にして道幅はすべて二間見通しといふことに改められた。石垣は家毎に取り崩された。この混雑の後には、御通行當日の大釜の用意とか、膳飯の準備とかゞ續いた。半藏の家でも普請中で取り込んでゐるがそれでも相應な支度を引受け、上の伏見屋などでは百人前の膳飯を引受けた。

道中奉行が中津川泊りで、美濃の方面から下つて來た。

一切の準備は整つたかと尋ね顔な奉行の視察は、次第に宮の一行の近づいたことを思はせる。順路の日割によると、二十七日、鶺鴒宿御晝食、太田宿御泊りとある。馬籠へは行列拜見の客が山口村からも飯田方面からも入り込んで來ていづれも宮の一行を待ち受けた。

そこへ先驅だ。二十日に京都を出發して來た先驅の人々は八日目にはもう落合宿から美濃境の十曲峠を越して、馬籠峠の上に着いた。隨行する人々の中には、萬福寺に足を休めて行くものが百二十人もある。先驅の通行は五つ半時

であつた。

奥筋へ行く千人あまりの尾州の人足がその後を續いて、群衆の中を通つた。それを見ると、伊那から來てゐる助郷の中には腕をさすつて、是非とも御輿をかつぎたいといふものが出て來る。宮も大變な人氣だ。半藏は父と同じやうに、麻の社袴をつけ、袴の股立ちを取つて、親子してその間を奔走した。

いよいよ馬籠御通行といふ日が來た。御通行筋は公私の領分の差別なく、旅館の前後里程三日路の旅人の通行を禁止するほどの警戒振りだ。

九つ半時に、姫君を乗せた御輿は軍旅の如きいでたちの面々に前後を護られながら、雨中の街道を通つた。嚴めしい鐵砲、纏、馬籠の陣立は、殆んど戦時に異ならなかつた。供奉の同勢いづれも陣笠、腰辨當で、供男一人づゝ連れながら、その後を隨つた。中山大納言、菊亭中納言、千種小將(有文)、岩倉小將(具視)、その他宰相の典侍、命婦能登などが供奉の人々の中にあつた。京都の町奉行關出雲守が

御輿の先を警護し、御迎へとして江戸から上京した若年寄加納遠江守、それに老女等も御供をした。これらの行列が動いて行つた時は、馬籠の宿場も暗くなるほどで、その日の夜に入るまで驛路に人の動きの絶えることもなかつた。

「吉左衛門さんは御存知だが、わたしたちが覺えてから大きな御通行といふものは、この街道に三度ありましたよ。

一度は水戸の姫君さまの御輿入れの時。一度は尾州の先の殿様が江戸でお亡くなりになつて、その御遺骸がこの街道を通つた時。今一度は例の黒船騒ぎで、交易を許すか許さないかの大評定で、尾州の殿様(徳川慶勝)の御出府の時。

あの先の殿様の時は、木曾谷中から寄せた七百三十人の人足でも手が足りなくて、伊那の助郷が千人あまりも出ました。諸方から集めた馬の数が二百二十四さ。」

「まあ、お聞きなさい。今の殿様が江戸へ御出府の時は、木曾寄せの人足が七百三十人、伊那の助郷が千七百七十人、この人数を合はせると二千五百人からの人足が出ました。あの時、馬籠の宿場に集まつた馬の数が百八十四匹だ

つたと思ふ。あれほどの御通行でも和宮さまの場合とは到底比べものにならない。今度のやうな大きな御通行は、わたしは古老の話にも聞いたことがない。」

御通行後の二日目は、和宮の一行も福島、藪原を過ぎ、

鳥居峠を越へ、奈良井宿御小休み、贅川宿御中食の日取である。半藏と伊之助の二人は連れ立つて、その日三留野御繼ぎ所の方から馬籠へ引き取つて來た。伊之助は伊那助郷の擔當役、半藏も父の名代として、いろ／＼と後始末をして來た。伊之助は聲を潜めながら、木曾の下四宿から京都の方の役人への祝儀として、先方の求めにより三百二十兩の金を差し出したことを語つた。祝儀金とは名ばかり、これはいかにも無念千萬のことであると言つて、御繼ぎ所に來てゐた福島方の役人衆までが口唇を嚙んだことを語つた。伊那助郷の交渉をはじめ、越後、越中の人足の世話から、和宮を迎へるまでの各宿の人々の心勞と盡力とを見る眼があつたら、いかに強慾な京都方の役人でもこんな暗い手は出せなかつた筈であると語つた。

半藏は父の名代として福島役所へ呼ばれ、木曾十一宿にある他の庄屋問屋と同じやうに金百兩の分配を受けて來た。この御下げ金は各宿救助の意味のものだ。半藏は御下げ金のことで金兵衛の智慧を借りて、御通行の日から残つた諸拂ひをした。(283—300)

## 九

(二十四) 参観交代制度の變革も事實となつて來た。これには幕府の諸有司の中にも反對するものが多かつたといふが聰明で物に執着することの少い一橋慶喜と、その相談相手なる松平春嶽とが、惜氣もなくこの英斷に出た。言ふまでもなく、参観交代の制度は幕府が諸藩を統御するための重大な政策である。これが變革されるといふことには、深い時代の要求がなくては叶はない。この一代改革はもう長いこと上にある識者の間に考へられて來たことであらうがしかし吉左衛門親子のやうに下から見上げるものに取つても、この改變を餘儀なくされるほどの幕府の衰へが眼についた。諸大名が實際の通行に役立つ沿道の人民の聲に聽

て課役を軽くしないかぎり、たゞ徳川政府の威光といふだけでは、多くの百姓も最早動かなくなつて來た。

「お前は今度の御達しをよく讀んで見たかい。参観交代が全廢といふ譯ではないんだね。」

「お父さん、全廢ぢやありません。諸大名は三年目毎に一度御三家や溜詰は一と月づゝ江戸に居れとありますがね、奥方や若様は歸國してもいゝと言ふんですから、まあ殆んど骨抜きに近いやうなものでせう。」

「半藏、この街道はどうならう。」

「参観交代がなくなつた後にですか。」

「そりや、お前、参観交代はなくなつても、まるきり街道がなくなりもしまいがね。」

「助郷にも弱りました。」和宮御通行の時は特別の場合だあれは當分の臨機の處置だなんて言つたつて、さうは時勢が許さない。一度増助郷の例を開いたら、もう今迄通りでは助郷が承知しなくなつたさうですよ。」

「さういふことが當然起つて來ます。」

「あの時は大湫泊りで助郷人足六百人の備へをしると言ふんでせう。みんな雇錢でなけりや出て来やしません。」

「いくら公家衆でも六百人の人足を出せば馬鹿々々しい。」

「あの公家衆の御通行には、差引、四兩二分三朱、村方の損になつたといふぢやありませんか。」

「兎に角、御通行はもつと簡略にしたい。」

「いづれこんな改革は道中奉行へ相談のあつたことでせう。街道がどういふことに成つて行くか、そこまではわたしにも言へませんがね。しかし上から見ても下から見ても、参覲交代のやうな儀式ばつた御通行がさう何時まで保存の出来るものでもないでせう。繁文縟禮を省かう、その費用をもつと有益な事に充てよう、成るべく人民の負擔をも軽くしよう——それがこの改革の御趣意ぢやありませんかね。」

(312—317)

## 10

(二十五) 到頭、半歳は父の前に呼ばれて、青山の家に傳はつた古い書類などを引き渡されるやうな日を迎へた。父

の退役は最早時の問題であつたからで。

本陣、問屋、庄屋の三役を勤めるに必要な公關の記録から、田畑家屋敷に關する反別、年貢、掟年貢などを記しつけた帳面の類までが否應なしに半歳の前に取り出された。吉左衛門は半藏に言ひつけて、古い箱につけてある革の紐を解かせた。人馬の公用を保證するために、京都の大舍人寮、江戸の道中奉行所をはじめ、その他全國諸藩から送つてよこしてある大小種種の印鑑がその中から出て來た。宿驛の合印だ。別の箱の紐を解かせた、その中には、遠く慶長享保年代からの御年貢皆済目録があり、代々持ち傳へても破損と散亂との憂ひがあるから、後の子孫のために一卷の軸とすると書き添へた先祖の遺筆も出て來た。

父は半藏の方で言はうとすることを聞き入れようとしなかつた。いろ／＼な事務用の帳面や數十通の書付などをそこへ取り出した。村方の關係としては、當時の戸籍とも言ふべき宗門人別から、檢地、年貢、送籍、縁組、離縁、訴訟の手續きまでを記しつけたもの。

「これも大切な古帳だ。」

と吉左衛門は言つて、左の手でそれを半藏の方へ押しやつた。木曾谷中の御免荷物として、木材通用の跡を記しつけたものだつた。森林保護の目的から伐採を禁じられてゐる五木の中でも、毎年二百駄づゝの檜、樅の類の馬籠村にも許されて來たことが、その中に明記してあつた。

青山、小竹兩家で待たれる福島役所からの剪紙（召喚狀）が届いたのは、それから間もなかつた。

それには青山吉左衛門倅、年寄役小竹金兵衛倅、兩人にて役所へ罷り出よとある。附添役二人、宿方惣代二人同道の上ともある。かねて願つて置いた吉左衛門等の退役と隠居が聴き届けられ、跡役は二人の倅達に命ずると書いてなすまでも、その剪紙の意味は誰にでも讀めた。(319—324)

(二十六) 半藏は江戸の道中奉行所から來た通知を受取つて見て一橋慶喜の上京がにはかに東海道經由となつたことを知つた。道普請まで命ぜられた木曾路の通行は何かの都合で模様替へになつた。その冬の布告によると、將軍上洛

の導従が東海道を通行するものが多いから、十二月九日以後は旅人は皆東山道を通行せよとある。(329)

一

(二十七) 本馬六十三文、輕尻四十文、人足四十二文、これは馬籠から隣宿美濃の落合までの駄賃として半藏が毎日のやうに問屋場の前で聞く聲である。將軍上洛の日も近いと聞く新しい年の二月には、彼は京都行の新撰組の一隊をこの街道に迎へた。一番隊から七番隊までの列をつくつた人達が雪の道を踏んで馬籠に着いた。(330)

(二十八) 毎月上半期を半藏の家の方で、下半期を九太夫方で交替に開く問屋場は、ちやうどこちらの順番に當つてゐた。吉左衛門の足はその方へ向いた。そこには書役といふ形で新たに入つた龜屋榮吉が早く出勤してゐて、小使の男と二人でそこいらを片付けてゐる。(331)

(二十九) 「街道の風儀も悪くなつて來ましたね。」「なんでも此節は力づくで行かうとする。こなひだも九太夫さんの家の方へ來て、人足の出し方が遅いと言つて、問屋場で暴

れた侍がありましたぜ。その侍は土足のまゝで問屋場の臺の上飛びがりましたぜ。そこに九郎兵衛さんがゐました。

あの人も見てゐられませんか、いきなりその侍を臺の上から突き落したさうです。さあ怒るまいことか、先方は刀に手を掛けるから、九郎兵衛さんがあの大きな體でそこへ飛びおりて、斬れるものなら斬つて見るがいと云つたさうですよ。ちやうど表には大名の賀籠が待つてゐました。大名は騒ぎを聞きつけて、漸くその侍を取りしづめたさうですがね」(393)

(三十)「それから宿の傳馬役と在の助郷とは譚が違ふ、半藏さまはもつと宿の傳馬役を威張らせて下すつてもいゝ。

さういふことを言ふんです。あゝいふ半藏さまの氣性をよく承知してゐながら、その威張りたい連中が何を話してゐるかと思つて聞いて見ると——一體伊那から出て来る人足などにあんなに眼をかけてやつたところで、あの手合は有難いとも何とも思つてゐやしない。そりや中には宿場へ働きに來て泊る晩にも藁遣ひをするとか讀書算術を覺えると

か、さういふ心掛けの好いものがなくはない。しかし近頃は助郷の風儀が一般に悪くなつて、博打は博つ問屋で拂つた駄賃も何も飲んでしまつて、村へ歸るとお定りの愁訴だ——やれ人を牛馬のやうにこき使ふの、駄賃もろくに渡さないの何のツて大袈裟なことばかり。半藏さまはすこしもそれを御存じないんだ。さういふことを言ふんです。大旦那の時分は好かつたなんて寄ると觸るとそんな噂ばかり」

「大旦那、まあ、聞いて下さい。半藏さまはよく參觀交代などはもう時世後れだなんて言ふでせう。町のものに聞いて見ると、宿場がさびれて來たら、みんなどうして食へるかなんて、さういふことも言ふんです。」

「そこで。半藏だつて心配はしてゐるんさ。この街道の盛衰に關はることを、誰だつて心配しないものがあるかよ。かう御公役の諸大名の往來が頻繁になつて來ては、繼立ては難澁するし、人馬も疲れるばかりだ。好いにも悪いにもかういふ時世になつて來た。だから、參觀交代のやうな儀式ばつた御通行はさう何時まで保存の出来るものでもない



といふあれの意見なんだらう。妻籠の壽平次もその説らしい。ちよつと考へると、どの街道も同じことで、往還の交通が頻繁にあれば、それだけ宿場に金が落ちる譯だから、大きな御通行などは多いほど好ささうなものだが、そこが東海道あたりとわれ／＼の地方とすこし違ふところさ。木會のやうに人馬の多く徴發されるところぢや、間屋場がやりきれない。事情を知らないものはさうは思ふまいが、木會十一宿の庄屋仲間が相談して、成るべく大きな御通行は東海道を通るやうにつて、奉行所へ歎願した例もあるよ。

俺は昔者だから參觀交代を保存したい方が、しかし半藏や壽平次の意見にも一理窟あると思ふね。」(399—400)

## 二

(三十一) いろ／＼な用事が半藏の身邊に集まつて來た。

參觀交代制度の變革に伴ひ定助郷設置の嘆願に關する件がその一つであつた。これは宿々二十五人、二十五疋の當備御傳馬以外に、人馬を補充し、繼立てを應援する定員の公役を設けることであつて、この方法によると常備人馬でも

應じきれない時に定助郷の應援を求め、定助郷が出てもまだ足りないやうな大通行の場合にかぎり加助郷の應援を求めるのであるが、これまで木會地方の街道筋にはその組織も十分に具はつてゐなかつた。それには木會十一宿のうち上四宿、中三宿、下四宿から都合四五人の總代を立て、御變革以來の地方の事情を江戸にある道中奉行所につぶさに上申し、東海道方面の例にならつて、これはどうしても助郷の組織を改良すべき時機であることを陳述し、それには定助郷を勤むるものに限り高掛り物(金納、米物、その他勞役を以てする一種の戸數割)の免除を願ひ、そして課役に應ずる百姓の立ち場をはつきりさせ、同時に街道の混亂を妨ぎ止めねばならぬ、そのことに十一宿の意見が一致したのであつた。もしこの定助郷設置の歎願が道中奉行に容れられなかつたら、御定めの二十五人、二十五疋以外には繼立てに應じまい、その餘は翌日待つて繼立てることにしたいとの申し合せもしておいた。馬籠の宿では年寄役蓬萊屋の新七がその總代の一人に選ばれた。(410—411)